

論 文

音楽療法士の成長に関する研究

——セラピストが成長するための示唆——

濱 谷 紀 子

同志社女子大学
学芸学部・音楽学科
特別任用教授

坂 下 正 幸

音楽療法臨床教育研究会
有料老人ホーム ハーネスト唐崎
音楽療法士

Abstract

Japanese music therapists who have completed postgraduate music therapy programs in foreign countries with a focus on humanistic psychology were interviewed in the course of this research. The results illustrate the importance of supervised training, developing sensitivity, and receiving training analysis in music therapy. It also became evident that if music therapists become aware of their own internal agendas, acknowledge them, and are able to integrate their artistic selves with their work as therapists, they will have a solid foundation on which to maintain their pride in their profession as effective music therapists.

Key words : 感性トレーニング、セラピストの傷つき、セルフケア、スーパーヴィジョン、音楽療法の専門性

はじめに

日本音楽療法学会認定音楽療法士は、1871名(2009年度)に達し、幅広い領域で音楽療法が実践されるようになった。しかし現実的には、音楽療法士が抱える課題は多々あり、筆者らは特に、(1)教育制度や資格認定に関する課題、(2)職業的課題、(3)音楽療法士としての成長、以上の3つの課題が重要であると考えた。

日本音楽療法学会^{注①}では、大学や専門学校の認定コースを経ない資格申請者の基礎教育のばらつきを是正するために、カリキュラムを再構成し、新資格認定制度^{注②}を確立しようとしている。また音楽療法士の社会的地位の確立や生活保障については、民間資格から国家資格化への推進事業が行われ、保険制度の導入も試みられている。そして今まで任意目標として認識

Prospects for Integral Growth of Music Therapists

されていたスーパーヴィジョン^{注③}も少しずつ重要視されつつある。

筆者らは、これらの教育や制度の整備の中でも特に将来にわたって不可欠な要素として、3つの課題の中の(3)の課題に注目した。そこで、今回この課題により深く対峙していると思われる音楽療法士を中心にメールによる聞き取り調査を実施した。

その結果、セラピストが自分と向き合うことの課題や成長のプロセスにおいて、何がセラピストの「やりがい」に結びつくのかを提言することが、これからの音楽療法士教育において大きな意味を持つことが明らかになってきた。本研究では、日本の音楽療法教育における次のステップの教育の提言を試みたい。

I. 音楽療法士の成長のために何が重要か

音楽療法教育は、音楽的技術や知識、対人援

助に関連する技術や知識、関連領域（心理、医学、障害学、福祉など）に関する基礎教育を基盤とし、その上に音楽療法の対象者と結びつけていく専門教育が必要とされる。日本では、学部レベルでの教育、または学会レベルの基礎教育コースが中心であり、「活動的音楽療法」、「療法的音楽活動」の実施のための教育が主である。これらの教育を受けて働く音楽療法士がぶつかる壁は何であろうか。

いわゆるデータに表しにくい音楽の効果は、心理的に人に深く入り、そこで対象者の心と対話する。音楽療法士はその音楽対話で起こる出来事を全身全霊で「きき、みる」（五感のすべてで臨的に受け止める）—例えば「聞く」、「聴く」、「訊く」、「効く」／「見る」、「観る」、「診る」、「看る」—ための力が求められる。同時にそこで起こることに自分自身が巻き込まれていく体験—転移・逆転移—も伴い、それらを受け止める力、調整する力が求められる。

これらの力が無い場合は、単純に自信の無さに打ちのめされ、バーンアウトしてしまうことが起こる。学部レベルの実習でも、学生は「自分の無力さに直面する」という形で、対象者の前で自分自身の存在の意味に打ち震える体験をする。一方で経験をつんだ音楽療法士は、日々の臨床で敏感に自己と向かい合うことが求められるが、そのために何が必要で、どう取り組むかが見えないのが現実である。

そこで筆者らは、以下の4つの視点を浮上させることを試みた。

- (1) 音楽療法士が治療者として、自分自身の課題を発見し直視すること
- (2) 芸術家あるいは表現者としてのパーソナリティーと治療者としてのパーソナリティーのバランスの調和を考察すること
- (3) セルフケアへの取り組み
- (4) 職業としての音楽療法士をどう考えるのか

そしてまずそのために、音楽療法士に対して倫理問題に関連しながら「音楽療法士が抱える悩みについて」というあえて曖昧な設問でのア

ンケートを実施した。回答した音楽療法士は意識的であり、積極的な方々であったが、回答内容は「経済的に報われない、職場での不利な立場、資格制度への不平不満」が目立ち、音楽療法士が内的に成長するためのテーマに触れることは少なかった。つまり、それらの悩みは、「制度が変わらないと解決できない」という外因に関連し語られることが多く、音楽療法臨床家として「対象者と音楽、対象者とセラピスト、セラピストと音楽」を中心に、それらの関係性を見直しながら、「自分自身の内面を問うこと」に触れる回答は少なかったといえる。

こうした内面を問う課題は、音楽療法士として成長する過程で必ずぶつかる壁であり、これらへの意識を持つことこそバーンアウトを避け、持続的な仕事を続ける鍵となり得る。日本音楽療法学会でも、これまで積極的に研究されてこなかった領域である。

そこで、先進国といわれる海外の大学院（音楽療法専攻）、特に人間主義心理学をバックグラウンドとした音楽療法コースを修了し、日本や海外で活躍する日本人音楽療法士を対象に聞き取り調査をした結果、教育過程で音楽療法やカウンセリングによる教育分析にあたるトレーニングを受けることの重要性、または、その過程における臨床家としての「感性」の成長、確立されたスーパーヴィジョンの重要性、セルフケアへの意識などの重要な課題に意識的に取り組んでいることが明らかになった。

Ⅱ. 方法と結果

すでに述べたように、調査対象は、海外（アメリカ、イギリス、オーストラリア）の音楽療法専攻大学院（修士・博士）、特に人間主義心理学をバックグラウンドとした音楽療法コースを修了し、日本や海外で活躍する日本人音楽療法士13名、日本でニューヨーク大学付属ノードフ・ロビズ音楽療法センターのクリニカル・スーパーヴィジョンを受けた2名である。難しい質問であったにも関わらず、2週間足らずでA4で計40枚にわたる回答が寄せられた。

追記からは、質問事項は回答者のほとんどが興味深いテーマとして日々向かい合っていたこともわかった。

今項では回答の要約とケースの部分を紹介する。また個人的な体験を深く書いた内容については割愛している。同じような意見はまとめた。文章は統一を図るために「である調」にし、語句も一部変更した。分類分けと文責は濱谷にある。

質問項目は、以下の通りである。

(質問1) 音楽療法を実践しているの悩み。

特に傷つきについて。またそこから解放され、成長にいたるプロセスをどのようにとらえているか。

(質問2) 治療者として、と表現者としてのパーソナリティーのバランスの調和をどのように考えるか。

(質問3) セルフケアをどのように実施しているか。

(質問4) 職業としての音楽療法をどう感じているのか。

(質問5) 自由記載

II-1. 「音楽療法を実践しているの悩み-特に傷つきについて。またそこから解放され成長にいたるプロセスをどのようにとらえているか」

回答には傷つきと同時にセラピー上での課題も同時に挙げられた。また「転移/逆転移」「多重関係」を課題ととらえる音楽療法士も多かった。

※「治療者」、「セラピスト」、「音楽療法士」の記述は回答者のものを尊重した。

(1) 傷つきへの認識

- ① 治療者自身が「傷つき」を認識していれば、治療者としての腕を磨くチャンスをもたらし、エネルギー源になる。
- ② 実践する上で「悩む」ということは「本気でクライアントと対峙している」証明である。
- ③ 「傷つく」ことも-その傷の発祥は「転移/逆転移」と関連する-セラピーをやる上では避けられない。
- ④ 自分が傷つかずセラピーをやっている人がいたら、そのセラピストは信用できないとも言える。
- ⑤ クライアントとの関わりの中での傷つき、セラピストとの関係性の中での傷つき、セラピストの私生活の中での傷つき、そういうものが、セッションに影響を及ぼすことは否めない。その傷がクライアントをより理解することにつながるケース、またはセッションを続行することが難しくなるケース、自分の傷と向きあうことでセッションそのものも発展・昇華するケース、など様々である。
- ⑥ プロセスを前向きに捉えられる治療者こそが、クライアントの葛藤やダークな部分を前向きに受け入れることができ、クライアントの葛藤に付き合えるセラピストとなる。
- ⑦ それらの傷と静かに向き合い、解決への方策を探ること。時にはその傷に身を任せてみて、そこから何が見えてくるのかを探ることが重要。時には「転移/逆転移」に発展するが、それを自覚することが大切である。
- ⑧ Diane Austin^{注④}はセラピストの傷つきが、よりクライアントの傷を理解し、またクライアントが理解されているという安心感を得ることができる、と言っている。セラピストが傷を持っていればよいということではなく、それを冷静に客観的に捉える為の、スーパービジョンやセラピスト自身のセラピー、サポート等についても触れている。

- ⑨ 音楽療法士は「A Wounded Healer (傷ついた癒し手)」であるという考えに共鳴している。セラピストとしてクライアントをケアするという一方通行の立場ではなく、クライアントとの療法プロセスから喚起される自分自身のなかにある傷にも向き合っており、その傷の癒しのプロセスを続けていくことが必須であると考えている。そういう意味で、クライアントは単に癒される者ではなく、癒しのきっかけにもなる存在という両面性をもっている。もし、セラピストがそれに気付かずに、セラピストとしてのオーソリティーを振りかざすことで、自分の傷に気づかずにクライアントとの癒しのプロセスにそれを投影してしまうことには相当の危険が伴う。セラピストの成長のプロセスは、クライアントのそれと同じであると思う。
- ⑩ セラピストもコンディションチャイルド^{注⑤}から始まり、成長過程において痛みや苦悩を伴いながら、音楽に支えられ導かれ開かれていく。セラピストがどれだけ音楽を信頼し探究するのか、そこに成長のプロセスの基があると感じる。それと同時に、セラピストは心理療法を受ける必要があると思う。心理療法により自己分析、自己受容が進み、バーンアウトを防ぎ成長を促せると体験的に思う。
- ⑪ 音楽療法士は、セラピーという心を扱う分野、しかも「助ける (アシストする)」ことを日ごろから取り組み、非/前言語レベルのエネルギーにもアンテナを張っている職業。更には、音楽というアートの世界で感性を育ててきたこともあり、自然と豊かな感受性を持ち、物事に敏感に反応するのではないかと感じる。この感情面での敏感さと奉仕の精神及び責任感の強さが、「傷つきやすさ」を生む要因のひとつと考える。
- ⑫ 私個人にとって、一番難しい類の傷つきは、「信頼」に関するものである。普段から、信頼を支柱に組み立てられる治療関係や治療過程を築いている中で、信頼を培うために、様々な努力をしている。なので、相手の誤解や理解不足・偏見から「自分 (或は音楽療法) が信頼されていない」と感じることはとても辛い。こうした場合、一概に自分の分析をするだけでは解決できないことが多く、客観的に状況 (患者の精神状態、「転移」の可能性、患者の持つ「音楽療法」の知識やこれまでの経験などの考察) を理解することも助けとなる。また、「罪を憎んで人を憎まず」のように、ネガティブな感情を引き起こした原因である言動にプロセスの注意を向けるよう心がけている。相手によっては、“たまたま” のことに過ぎなかったのかも知れないのだから。

(2) クライアントからの揺さぶられ

- ① 個人セッションにおいて難しいことが多かった。1対1の関係において、クライアント-セラピストの関係が表面上のものにとどまらず、ずっと深く掘り下げられ、お互いの内面を反映しあうからだろう。

(例) 海外で3年間、週1回の個人セッションを行った高機能自閉症の男の子は、自分のことを全て分かってほしい、自分の思い通りに世界が動いて欲しいと思っているコントロール欲求の強い子だった。日本人である私は、言語と文化のハンディがあり、彼の言っていることさえ全ては分からないし、好きな曲を言われても知らないことのほうが多かった。その度に、「ああまた分かってあげられない」と自分のがっかりし、イギリス人の音楽療法士が彼を受け持った方がよいのではないかと何度も考え、彼とのセッションビデオは、気持ちが沈むので次のセッションの直前まで見ないで過ごすことが多かった。そんな状態が1年~1年半も続き、ようやく状況が好転し始めたころ私が気づいたことは以下のことだった。

- ☆ 私自身の言語的・文化的ハンディをようやく受け入れて、「こんな音楽療法士もいるなあ」と自分の不完全さを受容できるようになっていた。
- ☆ 分からない時には「それ、知らない」と明るく、申し訳ないという感情を恐れることなしに彼に言えるようになったら、彼の方も、かんしゃくを起こすのをやめて「じゃあ、これは？」と私も知っている別のものを一緒に探そうとし始めた－お互いを理解するための相互の努力が見られ始めた。
- ☆ 嫌なことは避けたいというそれまでの自分の傾向（ビデオを見ることを引き伸ばすなど）から、その子の好きな曲を前もって予習したりスーパーバイザーに相談するなど、積極的に問題解決に取り組む努力をし始めた。
- ☆ 自分にはコントロール欲求の強い人と一緒にいると、コントロールされればなしになるかあるいは静かに去っていくかの行動があった。しかし対象者の彼とは、音楽療法士として一緒に居なければならなかったので、自分のそれまでの行動パターンを越えて、新たな対応（明確な枠組みをまず設定し、その範囲内で彼の表現は最大限尊重する－しかしその枠組みは、彼が何度も壊そうとしたが死守した）を模索できるようになった。
- ☆ このクライアントは、私が音楽療法をやってきた中で私よりも困難を感じた子であった。しかし、彼のおかげで、私の自我（エゴ）のいらぬ部分がそぎ落とされていった。肥大化していた自我が小さくなると、その後自分の理解できない状況に直面した時も、不完全な人間であることがすでに理解できているから、自我を不必要に守るという行動をとらないですむので、余裕を持って事態に全力で対応することができる。不快な思いをしたくない、嫌な事態は避けたいという思いは全て、陰でこっそりと大きくなっている自我を守りたいという欲求からくるのかもしれない。

(3) 音楽そのものや方法

- ① 自分自身への、また自分の能力やテクニックやマニュアルへのこだわりが大きすぎると傷つきの問題が起こりやすくなると感じる。
- ② 終末期の患者や高齢者のセッションで、自分が嫌いな曲をリクエストで歌わなくてはならない時に、心をこめてその人のためにシンボルソングを歌えば歌うほど、セッション終了後に吐き気がするほどの嫌悪感をおぼえる。これが続いたら仕事をやめるしかないと思ってしまう。なぜ嫌いか、なぜ受け付けられないかについては過去にスーパーヴァイズを受けたこともあるが、生理的にはどうにもならない。

(4) 多重関係

- ① 音楽療法終了後の自分自身の気持ちの整理が難しい。長期にわたる訪問セラピーでは、家族もサポートの対象だが、家族の一員のように扱われることも多く、セラピストとしての自分の役割と、家族に対しての違った役割や感情が生まれることを意識することもあり、精神的に、かなり揺さぶられることがある。これらは週一回のスーパービジョンで特に、「転移／逆転移」、倫理関係の問題のプロセスを行う。終了後、対象者と離れると、セラピーにおける未消化であった部分が少しずつ溜まってくる。その未消化な部分を、どのようにプロフェッショナルとしてのリソースに変えていくかが課題といえる。自分が十分にサポートできなかったと感じる状況を思い起こし、例

えば、どのような方向に保護者を導けた可能性があったか、もっと具体的な解決策を見出すことができなかつたか、状況を改善するためにどのようなステップを示せば家族にとって分かりやすく、自然な解決へ導けたかなど。このように、場面を思い起こし検討していくことが、セラピストとしての自信につながっていく。

- ②「音楽療法の実践そのもの」についてよりも、施設における自分の立場について、悩むことがある。自分の立場は「手も汚さず、相手の生活の世話もせず」ではないか。生活場面に少し入ることがあり、オムツを替えたり、鼻水を拭いただけでも、周りの保育者や介護者が恐縮する。音楽の専門職として給料に恥じないこととする、と必死で働いているが、私がこの悩みから解放されることはないであろう。また、自らをそこから解放する必要もないと思い、悩み続けていきたい。海外の有数の音楽療法士たちが、過去に音楽とは関係のない施設職員や看護アシスタントとして働いていたという事実が、自分に影響している。自分も出来る限り、休日に、近所の友人の重度障害のおさんの世話を、「友人」として手伝うようにしている。それでも自分の甘さに対する傷つきから解放されることはない

(5) スタッフとの関係またはスーパーヴァイズで浮上した課題

- ① プロセスチーム医療の体制の中で音楽療法を実践する時、つねに悩んだのは、治療観や価値観の異なるスタッフとの上手な距離の取り方であった。必要な時には正面きってディスカッションしなければならないし、お互い傷つけ合うのではなく無視し合うのではなく、建設的な関係を築くための努力を要した。分かりあえる人とは何の苦労もなく協力体制が築けるが、これは、自分自身の個人的な課題ともリンクしていると自覚した。自分のパーソナリティーをよりの確に理解する必要性を感じ、カウンセリングの勉強を5年前から続けている。そこでの気づきに随分助けられ、成長のプロセスに大きくつながっていることを実感している。
- ② いちばん厄介な問題は、音楽療法士間でのプライドや個人的問題の転嫁か。これに関して相当怖い思いもした。いまだに未解決だが、余計なエネルギーや負のエネルギーにはなるべく近づかないようにしている。それが何かを犠牲にする事であっても。自己防衛の本能か。
- ③ 個人的には傷つくことは避けられない。でも、癒す方法も自分の手しかない。その苦しいプロセスはクライアントにも相通じる点だと思って、自分で自分を奮い立たせるほかないと思っている。切り抜けたときにはそれを遂げた自分に自信もついたり、セッションも変わった。傷つくことは特にセラピストの卵、あるいは駆け出しの頃が多いと思う。
- (例) セッションやセッション後のスーパーヴァイズで組んでいたセラピストの対応が悪かった。スーパーヴァイザーからの提言でセラピストに全て正直に私の気持ちを話すことになった。その時「鎧も盾も矛もなにも無い私が冷たい大きな鉄の壁に体当たりしたって負けは見えてる」といった心境だったので、思ったことをそのまま伝えた。するとそのセラピストは目を丸くして「今まで誰もそんなこと私に言ってきたことなかった。もしかして、今まで私は他の人のことも傷つけていたのかしら？」という反応であった。いわゆるガチンコ勝負をしなければならないことがある。
- ④ ヴァイジーによくある問題は自分の先輩、あるいは上司の音楽療法士に傷つけられ、トラウマになっているということである。ある人は「90%の罵倒、暴言に絶妙のタイミングで10%の褒め言葉がある。それがあったからこの何年間か自分に鞭を打って頑張ってみたが、あるときふっと

これはDVに似ていると思った」とまで語る。また、べつの方は「セッションを離れても、その施設をやめてペアが解散になっても、まだ「あなたは私の弟子だから」と自分を支配しようとしてくる」などがある。つまり、自信がない時に追い打ちをかけられる。自信がないから、自分が悪いと我慢してしまう。しかし、結果的にはそれは良い方向にはならない。やはり、相手ときちんと話すというのがベスト。ただ、ここに日本独特の問題がある。当事者の経験者自身が自分に問題があるとは思っておらず、例えスーパーヴァイズを受けても一切アドバイスを受け入れないのである。

- ⑤ 音楽療法には自分自身がセラピーを必要とする人が参入することも多い。セラピストの中には、明らかに個人的な問題を抱えている人や障害を持っている人もいる。仕事で組む場合には自分が彼らより経験があっても彼らの個人的なセラピストではなく、同僚として組むので、業務上またはセッションでの指導やピアスーパーヴィジョンを実施する。いろいろな問題や課題を指摘しても受け入れる力がない人もいたり、強い抵抗を示したりする。時間をかけて成長していくことを目指すが、どうしても障害が問題になる場合には、まるでいじめをしているかのごとくの構造になる。うまくセラピーや治療機関へ移行できたり、対人関係の仕事から離れることができればいいが、なかなかうまくいかず、互いに深く傷つくことが多い。結局はどちらかが自然に離れるのを待つしかない。超日本的な解決方法かも知れない。

(6) 成長のプロセスについて

- ① いつも「音楽療法って何?」「自分にとって、人々にとって、どういう意味があるのか?」と自分に問いかける事で問題から解放されていくように思う。常に、根本に帰るといふか、そこがしっかりしていると、根から栄養をすって成長する木のように大きくなっていけるように思う。
- ② 私は、しょっちゅう小さなことでも気にしたり「傷ついた」りしている。例えば、誰か(患者や職員)の言葉に反応したり、ニーズや期待に応えられない自分を責めるなど。一時はこれが自分の弱さ・不足だと思い、悩んだこともあった。しかし、振り返りと“探求”のプロセスを重ねるうちに、「傷つく」反応を生んでいる原因は自分の中にあると気づいた。その頃から、こうした感情的な反応(時に反射的に起きる)を否定することなく、自分自身が何かを学ぶ機会だと受け止めている。時には、「傷ついた」という感情の原因をプロセスして探るのは、自分の受容し難い部分と向き合うこととなり、なかなか容易ではないが、大切な作業だと思っている。
- ③ プロセスを経て、自分自身を受け入れたり気持ちを整理したり、相手の気持ちや状況を理解することで、穏やかに対応でき、時には治療の一環として自分の受けた感触などを必要に応じて表現できるセラピストに成長してくのではないかと考える。

(7) その他

- ① 幸か不幸か、傷ついている余裕(?)がない現状に(死活問題)常におかれてきたので、傷ついたと思ったことがあまりない。音楽療法がなかなか人々に理解されず、重要な場面で計画がだめになる時は少し傷つくといふか落ち込んだようになるが、まあ時間がかかる問題なのだといつも長い目で見るようにしている。

Ⅱ-2. 「治療者としてのパーソナリティと表現者としてのパーソナリティのバランスの調和をどのように考えるか」

音楽のみならず、対人関係におけるパーソナリティに触れた回答もあった。回答は以下の4点に分類された。

(1) セラピストの基本的スタンスについて

- ① 双方は楽しみつつ苦悩しつつ、調和できるスタンスである。セラピストは、warm heart と cool head を持つべき、さらに加えて fresh mind を持つべき。「治療者として」、「表現者として」、に加えて、「自分として」という要素がかなり入ってくるので、その軸がぶれないようにしたい。軸がぶれなければ、何をやっても成立する。軸をしなやかに強くするプロセスはIと関係している
- ② 治療者は患者の心を映し出す鏡のような存在であるとする人間主義的アプローチに賛同するが、それは治療者がまったくの無になるということではない。セラピストの表現者としてのパーソナリティは、意識していなくても、自然と音楽の中に現れ出るものだと思う。ただそれを意識的に出してしまうと、クライアントの表現が抑えられてしまうことも起こるので、表現者としての自分自身もしっかり持っていつつ、治療の場では、クライアントの鏡となるべく用いられる音楽を支える役割をするものだと認識する。
- ③ 双方のバランスを、療法の場面で考えると、それはつねに、自由に動いているものだと思う。場面の必要性に応じて、治療者がそのバランスをコントロールし、最適と思われる音楽場面を作り出して行くのだと思う。
- ④ 双方の関係はくれぐれも気をつけなくてはならない。音楽療法士は自分も含めて「音楽することが好き」ということが原点の一つであろう。そして表現者と臨床家は立場として対立する可能性が充分にある。言葉の世界で考えれば、「演説や朗読の好きな人が、カウンセラーに向いているとは、まったく限らない、寧ろそうでない方が多い」、これは当たり前だが、音楽の世界では、なかなかこの自覚に至れない。音楽は療法士とクライアントが同時に音を発し合うことで調和が生まれ、それが「上手く作用すれば」療法的要素となる場合が多い。しかし、「相手のどこから何を聴き取れているか（感じ取れているか）が能力の分け目」であり、表現者とは根本的に異なる命題である。音楽療法士はその自覚を持ち続けることが重要。セッションの中で表現をする場合も、それが「いま、ここで」目の前の痛み、悩み、障害など抱えた相手に「よい形で」伝わらなければ、意味がない。
- ⑤ 常に自分のプロフェッショナルまた、パーソナルなアイデンティティー形成において、向き合っている問題である。治療者としてのスキルやアイデンティティーが強まれば強まるほど、純粋に自分のための音楽家＝表現者としての部分がなおざりになっているような局面がある。また、音楽家としての自分の中の音楽感を充足させることが治療者としての力を押し上げるものであると思う。本来それらは相互に補完的であるべきであって、区別されるものではないのかもれない。理想的な音楽療法士の在り方は、その二つが充足して共存しているからである

(2) 対象者や楽器との関係において

- ① 自分自身を表現し解き放つ経験が定期的にあることが、治療者として必要。一つ一つの音や、ハーモニー、リズムが、自分の“言葉”として扱えるようになるために、そして、その“言葉”が第

三者にどのように伝わっていくかを知るために、また、自分自身その楽器と対座したときに、自分がどのように動いていくのかを知るために、表現の機会があることが、望ましい。

- ② 対「人」を主軸にする関わりの中なかで、セラピスト本人のもつ個性は、ラポート（関係づくり）に大きな役割を担う。相手ありきのやり取りの中で、相手とのエネルギーの連動によって、互いに引き合い、引き出されるものがある。こうした積み重ねから、それぞれ固有の、ユニークな関係が築かれていく。
- ③ 治療者の主たる行動は「聴く」－クライアントの表現を聴き続ける－ことに関心を持ち続けることによって、クライアントがその段階を十分に体験して次のステップに移ることを促進させ、成長につなげていくこと。そしてセラピストの自己表現－わかりやすい大きな表現である時もあれば、何も言わない何もしなくても存在自体が表現となっている時もある。クライアントが自分の世界の中から一人で抜け出ることができなくなっている時には、セラピストの存在を気づかせるほどにはっきりとした大きなエネルギーをもって表現をする必要があると思う。
- ④ 確かにクライアントのワンパターンな表現の繰り返しに退屈したりもすることもあるのだが、それでもそれに音楽で反応し続ける意味を見出している。クライアントが、何が起こっているかよく分からないことをしていても、関心を持ち続けて音楽で反応していたら、10週間後にはっきりとした反応が出たこともある。そのような体験を積み重ねてきて理解できた。
- ⑤ クライアントあつての音楽、クライアントとのコラボレーションという概念は常にある。ただ、このバランスを意識しすぎると無理矢理音楽によってクライアントを操作することにもなりかねず、難しい。
- ⑥ 即興を取り入れたアプローチでは、セラピスト個人の音楽的バックグラウンドや好み、セッションに反映されやすい。「おしつけ」にならないよう、相手を主体に考え、音楽をプロデューサー、提供していくことを心がけなければならない。そのために対象者やグループと状況（Here and Now）のアセスメントを的確に行い、方向性を定めて行くのがセラピストの「治療者」の部分、それをいかに音楽でかたち創っていくかを定めるのが「表現者」の役割と思う。表現者としての感性がアセスメントに及ぼす影響もあれば、治療者の判断力が音楽的アプローチに影響を及ぼす事もある。
- ⑦ 治療関係の中では、関係づくりの過程において、自らのパーソナリティーをあらゆる面から理解し、臨機応変に適用させていくことが求められる。ある種、パフォーマーのような要素をはらむ事もある。セラピストが持つもとの性格（キャラクター）と、臨床上のアプローチとして求められるパーソナリティーは、違うことも往々にある。しかし、セラピーのプロセスに必要とあれば、これを“演じ”、表現につなぐ事も、セラピストとしての力量のうちかも知れない。

(3) スーパーヴィジョンや振り返りの必要性

- ① 音楽によって、自分がどこまで“動かされて”いいのか、どこからコントロールが効かなくなっていくのか、その見極めの難しさに直面している。療法場面では、音楽を使い、音楽の力を借り、音楽とともに、子どもとつながっていくが、音楽の先走りや、音楽が必要にもかかわらず不在になってしまう瞬間は、自分と音楽との関係の中に、不調和な状態が起こっている状態である。それに気づく力は、第三者のオブザベーションの下に、音楽と自分の対話を経験し、フィードバックを受けることで、培われてくると思う。

- ② 自分のしたことをやりっぱなしにせず、しっかり振り返ることで、それぞれのセラピストなりのバランスのとり方を経験的に獲得していくものとする。

(4) セラピストの資質

- ① 理想的なセラピーの環境作りには全人的アプローチが必要と思うが、「私もあなたと同じ感情や感動をもつ人間です」というメッセージの発信がないと、ポジティブな **Clinical Relationship** はできない。ある時、組んだセラピストが、表情や感情の表現がほとんどない音楽療法士であった。人間的表現が少ないため、クライアントとのコミュニケーション、関係作りに重大な支障があった。表現しすぎすべてにおいて、subjective な接し方も問題だが、その逆もクライアントが心から信頼できる関係（セラピーの土台）は築けない。この音楽療法士は、自分のトラウマに気づいておらず、それに触られる事について強い拒否反応を示し、残念ながら仕事を途中でやめてしまった。
- ② セラピストと表現者のバランスは臨床経験の中で培われるものと思う。問題や壁にぶちあつた時、謙虚に立ち向かっていく姿勢を持つことが調和のとれたセラピストに至る道だと思う。セラピストがまず精神的に満たされていること、クライアントや人に興味があることが音楽療法の臨床効果をあげるために重要だと日々思う。セラピストのそういった資質を育てることが教育の中でもっと集中してされるべきだと思う。

II-3. 「セルフケアをどのように実施しているか」

日本ではセルフケアの概念そのものを持たず仕事をしている音楽療法士が多いが、回答ではほとんどのセラピストが自身がセラピーを受けた経験、必要性の認識、日常生活でのセルフケアへの意識を持っていることがわかる。3点に分類された。

(1) セルフケアの必要性について

- ① 音楽療法コースにいた間、毎学期セルフケアのレポートを書いてプレゼンテーションをする課題があり、その頃は直接音楽療法と関係ないのに何故そこまでするのかと思った。実際日々多くのセッションをこなすようになって初めて、いかにセルフケアが重要であるかに気づいた。音楽療法は精神的肉体的に負担も大きく、バーンアウトしやすい職業。自分の心の状態を自分で把握し、バーンアウトしないように対策を立てるのもプロの仕事のうちであると強く思う。
- ② 意識的に持つ必要のあるものである。
- ③ かつてニューヨークの小学校、幼稚園で常勤音楽療法士として、多い時は一日7セッションくらいしていたが、それが自分を痛めつけていたことに気づき、家では一切音楽を聴かなくなった。帰国して9年経つが、ようやく車のなかであれば音楽をかけてもいいか、という気持ちにまで復活した。仕事の準備のために音楽を聴くことはあるが、昔のように朝起きたら、あるいは帰宅したらすぐにステレオをかけるということは一切なくなった。セルフケアは絶対に必要。

(2) 自身がセラピーを受ける経験またはそのためのワークについて

- ① 現在は中止しているが、これまでのセルフケアはカウンセリングに通う、音楽療法を受けるなど。

- ② 実のところ、現在自分が「音楽療法を受けたい」とは感じていない。セラピーを受けたいと感じる音楽療法士に身近なところで出会っていないからである。アメリカではいたので、人生の大変な時期に受けた。今は、近所の呼吸法教室に参加することが、人間としてもセラピストとしても、大きな支えになっている。時にはその中で語り合う時間もある。
- ③ 信頼できるカウンセラーを見つけること。
- ④ 同じような立場の人たちとサポートグループを組織して従事する。ネットワーキングでも行える。(例えば、今自分は子育てと音楽療法の仕事を両方しているが、母親になったクリエイティブ・アーツ・セラピストたちと色々な表現媒体を用いたサポートグループを毎月開催している。また、音楽療法コースの同級生達と、音楽療法のテキストを読んでディスカッションするブッククラブを毎月開催している。
- ⑤ 隔週で自分のセラピーに行くことが今年目標
- ⑥ 仕事上何か問題があるときには、必ず信頼できる同僚仲間に相談しとことん話し合う。それが自分にとってのセラピー。
- ⑦ かつてはきちんとセラピーに通っていたが、今はスーパーヴィジョン、あるいはピアスーパーヴィジョンで自分自身をニュートラルにしている。
- ⑧ 一人で抱え込まず、同僚や他職種スタッフとのディスカッション、スーパーヴィジョンなどを行う。
- ⑨ 深いパーソナルな問題の時は、信仰に目を向ける。自身の持つ信仰ではなく、神様から与えられた信仰で、一方的に無条件に与えてくださる愛を瞑想し、その中におかれている事を感謝し賛美する時すべてから解放される。
- ⑩ 言葉を紙に書き出す(マインドマップ、思いつく言葉を書きなぐるなど)。アートのような抽象的な表現で表してみる(音楽や絵を通しプロセスするなど)。

(3) 日常生活のセルフケア

- ① マッサージに行く、カラオケで歌う、家族との時間、美味しいものを食べる、好きな歌手のテレビおよびDVDを見る、など数えきれないほどの「楽しみ」をする。・体を整えること。友人や仲間と語り合うこと。・趣味の陶芸に没頭することでなんとなくバランスが保たれている。
- ② 幸い身近に美しい森や川、海などがあり、自然の中に身を置くことである。
- ③ 何か感情が自分の中にある時は、歌を作るのも一つの解決策になっている。
- ④ 自分自身を感じる時と場をつくるようにしている。自分へのまた自分の音楽へのこだわりから解放されること、治療者としてまた音楽療法士として大事なこと。
- ⑤ 家で黙々と電子ピアノを弾く時間、または仕事の合間に自分ひとりで、自分の楽しみとして、施設のピアノを弾く時間を大切にしている。自分の心の動きを自分で聴くことで慰めている。
 - ・自分のために音楽を演奏する時間を持つ。
 - ・自分のための時間と音楽の時間を持つ(専門楽器の練習やアンサンブルを続ける)。
 - ・セッションにはあまり関係のない楽器や音楽のレッスンを受ける。
- ⑥ 精神的にも身体的にも自分の限度を知り、無茶を強い続けないように心がける
- ⑦ 音楽療法から離れた仲間との交流をはかる、体を動かすなどでリフレッシュする。
- ⑨ 消耗しすぎる前にエネルギー補給をする(睡眠をきちんと確保する、クリエイティブな楽しみの時間を持つ)。

II-4. 「職業としての音楽療法をどう感じ考えるか」

音楽療法先進国といわれる国々でも十分に確立されていない現実や問題点もかいま見える。一方で魅力ある仕事であることは全員が支持していることがわかる。

(1) 魅力

- ① あきない仕事。社会的にはまだ認知は低いが個人としては、自分にあったこれ以上の仕事はないと思っている。
- ② 素晴らしい職業。音楽という媒体を通して、クライアントの成長はこの仕事の大きな醍醐味。またクライアントを通して家族や地域と深く関わり、その輪が広がっていくことも素晴らしい産物だと思う。また音楽療法を実践する上で、心理学や哲学とも深く関わることは、音楽療法士の人生そのものにも影響を与え、一つの職業としてだけにとどまらない分野であると感じる。
- ③ 音楽療法という職業で生き、活かされている場所があるということはたいへん嬉しい。音楽療法士として病院で仕事を始めてから17年目をむかえ、その中で学んだこととして、音楽療法はクライアントに関わり治療を行うパズルの一つ。チームの中で活かされてこそ音楽の治療としての本領が発揮されるのではないか。
- ④ 個人的に、職業としての音楽療法を考えると、一生涯の仕事。

(2) 音楽療法の可能性

- ① 音楽療法は、型がきっちり決まっていない幅と奥行き幅広い分野なので、一人の人の中にある、もやもやとしたわけの分からない感情、激しい攻撃性、あるいは型にはまりきった行動パターンまで広く対応でき、分離している複数の顔、ひいてはその人の人格の統合を促進する可能性を秘めている。人のさまざまな「顔」に対する社会的な期待がどんどん高まって、そのプレッシャーにより、いよいよ生きづらく感じている人々が増えてきている今、音楽療法の持つ柔軟性が何か新鮮な空気の風穴になったらよいなと思っている。
- ② 0～3才児の発達は、すべての発達領域が、オーバーラップしているので、それを考えると、音楽は総合的な活動を提供できるいい媒体。しかも、瞬間瞬間に子どもの必要性に応じて、違った発達領域にフォーカスすることが可能。また、総合的な活動なので、子どもの発達の勝っている部分を使って、手助けの必要な分野をのばす手助けが可能である。
- ③ 一人の子どもに言語療法士、理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカーと、関わる機会が多い。音楽療法を「ミラクル！」と賛辞されることから、専門領域の言葉で評価するプロセスが得られる。

(3) 役割

- ① 専門的な音楽療法の仕事も大事、一方「音楽の先生」としての便利屋になることも大事だと思う。ひとつひとつ異なる施設全体の中で、どのような形態の音楽活動が、誰に、どんな行事に、どんな生活場面に役に立てるか、とことん柔軟に対応するよう心がけている。便利屋になることで、保育や介護職員の人達との関係づくりができると、音楽療法セッションへの協力も得られやすくなる。

② 個人セッションの際、「音楽療法」という看板でなく、「即興奏レッスン」という看板を出すことがある。自分も含めて日本人は（たぶんアメリカ人でさえも多少は）「心理療法を受けること」への抵抗感がある。そのため、「楽譜に頼り過ぎない子になれるように」、「いろんな楽器を柔軟に使えるように」、「音楽活動で相手とコミュニケーションが取りやすくなるように」など具体的な目的を看板に添えることがある。アメリカの精神障害の人達の集団セッションでさえ、「おわりの歌」で "We are here in the Monday music class" という歌詞を、メンバー達が作ったことあった。対象者が受け入れやすくなるのであれば、それも良い意味での「良い加減」な方法かも知れない。ただし「あくまでもこれはレッスンである、クラスである」という線引きを私自身の中でも保つようにしている。これ以上の深入りは、療法の領域になると感じつつ「レッスンのふり」を続けることになり、倫理問題となる。

(3) 職業的課題

- ① 音楽療法の発展のためには「職業」としてそれを行う器が必要だと思っている。セラピストが、プロフェッショナルとしての自覚を持ち、研鑽を怠らず、バーンアウトもしないためには、身分の保障と安定した収入は大きな力となる。器がなければ、我々は守られず、個人レベルで終息し、音楽療法全体の発展はないと思う
- ② 日本と米国両国での仕事を経験しているが、両国においても総体してまだまだ発展途上であると思う。昨今の経済危機においては、求人数も減り、最初にカットオフされる部門でもある。しかし、それでもなお音楽療法が必要とされる必然性を私達が日々の臨床に励むことで広く伝えていくことが、職業としての音楽療法の発展につながると思う。
- ③ 職業としての音楽療法を根づかせていくためには、現場での実践、教育機関などでの養成、行政への働きかけなど、厳しい社会情勢の中でもこつこつとやっていく他にないのではと思う。
- ④ 音楽療法の存在自体が混沌とした中で、職業としての音楽療法を続けるためには多くの課題があるし、このままでは難しいと思う。音楽療法を一般の人にもっと知ってもらおう努力、ビジネスマインドを持って地道に活動していく必要がある。独りよがりや自己満足での音楽療法にならないような予防策（継続的なスーパービジョンなど）を立てて、音楽療法の質を保つ必要がある。
- ⑤ 最近よく考える事だが、「職業としての音楽療法というのはなかなか成り立たないのではないか」ということである。アメリカでは、もうすでに音楽療法がひとつの職業でもあるかのように勘違いしている人が多いが、どんな環境でも対応していく音楽療法を、職業としていく素材のある人間というのは非常に少ないと感じる。音楽療法は地味で根気のいる仕事であり、人と人とのふれあいの中で成り立つ仕事。今の世代が求めているものとはある意味で正反対の性質を持っていると感じる。「早くて簡単で人や自分へのチャレンジは避けたい」ものを求める一般の若い世代にとっては非常に苦しい職業。アメリカでは音楽療法士の育成も短期で合理的なやりかたが主流になってきているようだが、これから、音楽療法が職業としてどうなっていくかは、音楽療法士の教育、育成現場にかかってくると思う。また、音楽療法士でなければできない、音楽療法士は素晴らしい！とクライアントが思えなければ、この職業は廃れていくであろう。今の音楽療法教育現場はこの消滅への道を歩き出しているように最近思ってしまうのは、私だけであろうか。
- ⑥ 割に合わない仕事だなと実感している。60分間、神経症レベルのクライアントの話を聞く場合も多々あり、精神的にも体力的にもギリギリ。もちろん、素晴らしい仕事というのはわかりきっ

ているが、「心」相手の「見えない力」にはお金を出さない、サポートしないという傾向がある社会で、どれだけ変化してきたかというものの評価が難しく、また世間からはレクリエーションの域を脱しない程度の認知しかないのが悲しい。

- ⑦ 音楽療法士の持つスキルはこれからも一層必要とされる。現時点での模索からぼんやり見えてきている音楽療法の姿は2つあり、ひとつは、専門性の高いもの：専門機関などでの取り組み、もうひとつは、コミュニティをベースにした身近な取り組みがある。前者は、専門性も高く、セラピストの立場もサイコセラピー（心理）や医療の分野で、ある程度認められている環境におかれていると思うが、後者は、コミュニティの中での「身近さ」や「親しみやすさ」が大きく求められている気がする。
- ⑧ サイコセラピーとしての音楽療法が、世間一般的に理解されているかという疑問だ。集団やレクリエーション的な要素を母体にした内容が多く、表面的あるいは単発的な関わりが中心のように感じられる。実際に病院という組織の中で仕事をして感じる事は、「縦」社会の構造が強く根付いていて「横」へつながる関係が広がりにくく、情報の共有が図りにくく感じる。他職種（医師を含む）からの理解を得るのも一苦労である。しかし、少しづつ興味と理解を示してくれるスタッフや院内コミュニティの人たちが支えてくれている確かな手ごたえもある。色々な意味で、発展途上の一途を辿っている事は間違いなく、献身的な普及運動が必要かと感じている。
- ⑨ Wellness という言葉から考えると、ありとあらゆる分野やポピュレーションとの取り組みが可能のため、逆に散漫になってしまうのではないかの懸念もある。ストレスレベルが非常に高く、「癒される」ことを求めている社会人層や学生は多いと思う。幼児・児童や高齢者では、非言語的関わりを通し、表現や発散、コミュニケーションへとつなぐ事も重要な取り組みである。変化し順応・適合していく能力に長けており、音楽療法の知識やスキルを生かして貢献していけることは大きい。
- ⑩ 国の医療や保険制度において、また音楽療法士という職種への保証のためには、資格制度が整うことが求められる。ただし、国家資格となった場合、これが規定する内容と、セラピストが実際に求めているものが合致していなければ、せっかく制度が整っても問題は残る。

Ⅲ. 考察

今回の聞き取り調査の結果は、音楽療法士の成長を促すための要素を大きく示唆した。主に4つの視点から考察する。

(1) 感性トレーニングと言語化

岡崎（2007）は「音楽療法士の臨床実践能力として、専門職としての知識・技法と共に『臨床家としての感性』が必須となってくる。すなわちこれは、セラピストがクライアントに対する敏感な気づきと適切な認識および判断力を体得していること、セラピスト自身が主観的・客観的という両方の観点から自己を見つめ直し治

療者としての自分を最大限に生かす能力を持つこと、クライアントとの対人関係を鋭敏かつ緻密に把握しながら臨時的・創造的に治療を進められることなど、直感や感性にまつわる能力である」¹⁾とし、このような感覚・感性を磨く教育技法を「感性化トレーニング」と定義している。

そのための訓練として一例を挙げる。筆者¹の受けた訓練の一つが、音楽による他者との対話・及び自己との対話をテーマとしたニューヨーク大学大学院音楽療法学科における「音楽療法グループ」の授業である。4～5人の学生に指導者が2名ついて毎週即興演奏を行い演奏後話し合うこともある。また音楽について語るだけのこともある。そこで行われたことや各自

の感じ考えた内的なプロセスは毎週レポートとして提出し、言語化することが求められる。また、即興演奏に関する授業だけでも、歌・楽器演奏・グループ活動の3つが設置されていた。これらは単に技術的な訓練というよりも、音楽による対人関係への観察や感覚を磨くことと同時に、自分自身の中にどのような感性や感覚が起り変化するかを客観的に観察することも問われた。

これらによって、音楽療法を学ぶ者が音楽療法「的」体験をする（学生でありながらセラピーの体験をする）－教育分析に近いと筆者は考える－機会を必ず持つのである。

このような感性トレーニングを受ける機会は音楽や対人援助技術を高めるためだけでなく、「臨床家としての感性」を高めるために必須の教育であると考えられる。

(2) スーパーヴァイズ

濱谷・坂下（2010）ではスーパーヴィジョンの重要性を提示した。仕事のチェックのため、また悩みに向かうためにどう対処するか、それがスーパーヴァイズの目的となり得る。受けることによってどのような成長が期待されるであろうか。時にはセラピストとしての自己肯定とやりがいを認識するために、スーパーヴィジョンによって裏付けてほしいと願い、より効果的であった音楽療法の症例をスーパーヴィジョンにかけることがある。しかし実際に指摘されたこととの差異こそがスーパーヴィジョンの中核なのかもしれない。

わが国の音楽療法の現状を考慮すると、スーパーヴィジョンを受けなくてもやっていける現状がある。また受けたとしても、個人的に深められる場面設定ではなく、公開であったりするとハウツーに終始せざるを得なかったりする。またスーパーヴィジョンが受け入れられないセラピストもいる。その場合、ヴァイザーを変えて「自分は悪くない。認めてほしい。」「とりあえずアリバイ作りのために受ける。」などということも起る。つまりセラピストが受けてき

た教育過程により、スーパーヴィジョンへの意識が異なり、スーパーヴィジョンとは、一体何なのかを伝える必要性もある。

今回の調査では、教育課程ですでに個人そしてグループにおいてスーパーヴィジョンを受けることが当たり前と認識されてきたことの重要性が浮き彫りにされた。

(3) セルフケア

対人援助職のセルフケアは従来、バーンアウトに絡んで語られてきた。しかし、コウリーら（G.Corey et al.）（2004）は、「セルフ・ケアは、ぜいたくではなく、倫理的義務なのです。自分自身に滋養を与えてあげないで、クライアントに滋養を与えることはできません」²⁾と倫理に関連したテーマであることを示唆した。

セラピストは対象者に音楽療法を行うにあたり、対象者を理解し、対象者と音楽の関係性についても注意深く観察しているが、自分自身については後回しで、無頓着といった傾向にあるという指摘がなされている。特にわが国で「活動的音楽療法」や「療法的音楽活動」を基盤として活動する音楽療法士の多くが、実際に音楽療法を受けた経験が少ない現況が推察される。つまり対象者に対してセラピスト自身が経験したことがない治療活動を実践するのは、倫理的にも問題がある。

だが日本音楽療法学会認定音楽療法士の資格細則において、セラピスト自身が音楽療法を受けることが義務付けられていないために、このような現実がある。実際にそれを実行する音楽療法士がほとんどいないという現実もあるのだが。しかし、対象者には自分について直面させ、見つめさせ、変化させようとさせているが、セラピスト自身が音楽療法を受けた経験がない現況はあきらかに倫理問題であるといわざるを得ない。

また、コウリーらは「自己探求に取り組もうという気持ちがないと、私たちの不安、抵抗、個人的葛藤、個人的欲求などが邪魔をして、クライアントに寄り添えないことになりかねませ

ん」³⁾と述べ、自分自身を知らないセラピストが、知らず知らずのうちに悪気もなく冒してしまう対象者への害について警告している。

さらにコーリーは、「心理的にも肉体的にも疲れきったセラピストは、本当にクライアントを援助することはできません。自分の苦しみに対して感覚が麻痺してしまったカウンセラーは、クライアントの苦しみを扱う資格がありません。職能を損なわれた実践家は、彼らの援助を求める人に対して、益よりも害を与えるかもしれません」⁴⁾と述べ、自分をケアできていないセラピストが、倫理的にも対象者にも背いていることが指摘されている。

セラピスト自身がどのくらい疲れ、傷ついているのかを知るには、自分と向き合うことであろう。ゆえに普段から自分と向き合う姿勢を持っていることが必要になる。

まとめ

本稿では、海外で音楽療法の大学院レベルの教育を受けてきた音楽療法士への調査から、セラピストへの「成長」への示唆を導き出すことを研究目的とした。終局的には、感性トレーニング、スーパーヴィジョンならびにセルフケアを中心に音楽療法教育分析の必要性を示唆することになった。そしてそれらの学びは、音楽療法士が治療者として自身の課題を発見し、芸術家あるいは表現者としてのパーソナリティーと治療者としてのパーソナリティーのバランスを調和することが、意義ある音楽療法士という「職業」への誇りを堅持する支柱となることも明らかになった。

現実には日本では音楽療法の大学院レベルの教育はほとんどなく、留学に頼らざるを得ない。しかし、帰国者が増加し日本の音楽療法への適応が進んできている現在、彼らの力を借りつつ、学ぶチャンスを得る可能性増加しつつある。音楽療法対象者は、現代社会で生きている人たちであり、その同じ時代に生きる音楽療法士に課せられた成長への課題に向かい合っていく使命がある。

最後に、音楽療法士の「成長」に関する課題は多々あるが、「セラピストが自分と向き合うこと」、そして「音楽とセラピスト、もしくは音楽と対象者、そしてセラピストと対象者の関係性を見直すこと」などは非常に重要なテーマであり音楽療法士の「成長」には不可欠な部分であることを確認したい。このようなテーマは、「重要なテーマ」だと認識しながらも避けて通りがちである。自分と向き合い、音楽や人間との関係性を見つめ直し、言語化することは、非常に重要であると確信し、本研究が多くの音楽療法士の支えとなることを期待する。

謝辞

本研究の実施に際して、聞き取り調査にご協力いただいた音楽療法士の方々に感謝の意を表する。

注

- ① <http://www.jmta.jp/>
- ② 日本音楽療法学会ニュース 17号参照
- ③ 濱谷紀子・坂下正幸 (2010)「音楽療法士のスーパーヴィジョンに関する一考察」同志社女子大学人間文化研究紀要、2010年 第27巻
- ④ "The Wounded Healer - The Voice of Trauma: A Wounded Healer's Perspective" (2002) by Diane Austin from "Music, Music Therapy and Trauma". Jessica Kingsley
- ⑤ ケネス・E. プルシア編「音楽療法ケーススタディ(上)」音楽之友社

文献

- 1) 遠山文吉編「音楽療法の現在」岡崎香奈・羽田喜子 (2007)「音楽療法士が「自分と音楽との関係」を見直すこと-感性化トレーニング体験記から」128、人間と歴史社
- 2) ジェラルド・コーリー編著 村本詔司監訳 (2004)「援助専門家のための倫理問題ワークブック」創元社、93
- 3) 前掲書、94
- 4) 前掲書、95
- 5) 濱谷紀子・坂下正幸 (2010)「音楽療法士のスー

- パービジョンに関する一考察」同志社女子大学
総合文化研究所紀要、第27巻、24-37
- 6) 坂下正幸 (2006) 「音楽療法の倫理的課題に関する一考察」近畿音楽療法学会誌、vol.5、76-82
 - 7) 中村花香 (2007) 「クリニカルリスニング」船橋音楽療法研究室年報、通巻6号
 - 8) R・フレイジャー+J・ファンディマン編著 吉福伸逸監訳 (1991) 自己成長の基礎知識② 春秋社
 - 9) Colin lee (1996) Music at the Edge, Routledge
 - 10) Colin Lee (2004) コリンリー・音楽療法特別講座、ミュージックセラピー PPLAZA 大阪、2004
 - 11) "The Wounded Healer - The Voice of Trauma: A Wounded Healer's Perspective" (2002) by Diane Austin from "Music, Music Therapy and Trauma". Jessica Kingsley
 - 12) ウィリアム・デイビス, ケイト・グフェラー, マイケル・タウト編著・栗林文雄監訳 (2006) 音楽療法入門 (第二版) 上. 一麦出版社, 札幌, 198.
 - 13) キャロライン・ケニー 近藤里美訳 (2006) フィー
ルド・オブ・ブレイ. 春秋社, 171-172.
 - 14) 坂下正幸 (2007) 音楽療法における専門性をめぐる一考察. 近畿音楽療法学会誌 vol.6, 89-97.
 - 15) トマス・F・ネイギー著 村本詔司監訳 (2007) 心理学倫理問題事例集. 創元社, 大阪, 233-241.
 - 16) ハンス=ヘルムート・デッカー=フォイクト他編著・阪上正巳他訳 (1999) 音楽療法辞典
 - 17) ピーター・バステイアン著 澤西康史監訳 (1994) 「音楽の霊性」工作舎
 - 18) ハンス=ヘルムート・デッカー=フォイクト著 (2002) 「魂から奏でる」人間と歴史社
 - 19) メアリー・ブリーストリー著 若尾裕他訳 (2003) 「分析的音楽療法とは何か」音楽之友社
 - 20) 氏原寛 (1997) 「転移/逆転移」人文書院
 - 21) アンドルー・ワイル著 上野圭一訳 (1995) 「癒す心、治る心」角川書店
 - 22) R・フレイジャー 吉福伸逸監訳 (1991) 「自己成長の基礎知識」春秋社